

伝道する教会の形成

——世界伝道と私たちの使命——

レーマン, G. D.

序

キリスト教会の歴史で注目すべきことのひとつは、その発展の実態である。イエス・キリストの復活の証人として選ばれた一握りの弟子たちから始まったキリスト教会は、2000年後の今、多様な形態で地球上の人口60億人の三分の一を占めている。しかしながら今ひとつの実態は、ここ日本と同様、むしろ西洋世界ではさらに深刻に、私たちが身をもって感じているのは、この発展が事実上停滞していることである。私はこの小論において、現在多くの教会が直面しているジレンマに関して歴史的な分析に基づき、いくつかの考察を行いたい。

ここでは私は今日の教会を生み出した20世紀の間の教会形成の特徴を要約することによって、20世紀半ばに教会が直面した困難の源を明らかにしようとした。さらに私は20世紀後半の教会の問題点と課題を明らかにし、私たちが今日、目指している伝道する教会になるための聖書的神学的方向付けを得たいと願っている。

第I部 教会の歴史的拡張の特徴

A. 使徒後の時代

教会の進展がペンテコステから始まったことはいうまでもない。イエス・キリストの復活の目撃者たちは聖霊によって力づけられ、彼らにゆだねられた課題に取り組んだ。まさにペンテコステのその日から、福音は諸民族に語りかけ

られ、驚くべき成果をあげていた。最初の回心者はユダヤ人、そして異邦人ユダヤ教徒をふくむ諸国民から改宗者を得た。初代教会の指導者たちは、すぐにこのことをイザヤとゼカリヤの預言の成就とみたであろう。

「多くの民が来て言う。『主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう』と。主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る」（イザヤ 2:3）。「万軍の主はこう言われる。その日、あらゆる言葉の国々の中から、十人の男が一人のユダの人の裾をつかんで言う。『あなたたちと共に行かせてほしい。我々は、神があなたたちと共におられると聞いたからだ』」（ゼカリヤ 8:23）。

これが弟子たちのもった最初理解であるとしても、この理解はやがて間もなく変化した。三つの要素が働いて初期キリスト者の考えと行動は徐々に修正されていったのである。

(1) キリストの第二の来臨は期待されたように早くはこないということ。歴史的な文脈を強調する歴史家ルカが恐らく最初に認識したことであろうが、教会の宣教内容は短期間の、熱狂的な事柄ではなくて、歴史の中で、世界に着実に展開していくプログラムであるということ。

(2) 第二に新しく形成された教会の運動は外部からエルサレムへというのではなく、内部から外部へ、すなわちエルサレムに生まれ、全世界へと広がったことである。この発展はパウロとペテロの経験から特に明瞭になった。選民思想は退けられた。イエス・キリストはすべての人のために死なれたのである。

(3) 第三にエルサレム教会を中心としたキリスト教運動は紀元 70 年のエルサレム破壊と共に終わった。その出来事以来、キリスト教は聖地を持つことなく、主イエス・キリストにのみ焦点を置いてきた。キリスト者は神の民、地上の旅人であり、聖霊の賜物を受け、神の言葉すなわち聖書を手にして、エルサレムの必要はなかったのである。

初代教会は、伝道する教会であった。たしかにパウロやバルナバのように福音を宣教するために教会の代表として選ばれ任命された専従者はいた。しかし第 1 世紀の福音の伸展はこれらの人たちの働きが主なものではなかった。使徒

言行録 8:4 をみるとステパノの殉教に続いて起こった迫害で散らされたキリスト者たちはそれぞれのところで福音を宣べ伝え新しい回心者を得、教会をたてた。初期のキリスト者の多くは奴隷であり商人であり、職人であったが、皆、証し人であった。これらの初期の宣教者たちが無名であったことは印象深い。第2世紀にはキリスト者の活動の主な中心は三カ所、アンテオケ、ローマ、アレキサンドリアであった。これらの教会の設立者が知られていないということは注目に値する。教会はキリストの体であり、イエス・キリストが始めたもうたことを教会が引き継いだのである。焦点はキリスト者が行く先々で証し人の共同体を形成することであった。軍事力で平和を保ち、整備された道路で効果的なネットワークをもち、ギリシャ語を共通語としたローマ帝国は、第1世紀から第4世紀の間、福音の伝播に好都合であった。最初の頃の教会はパレスチナの地方言語であるアラム語を話していたが、まもなく共通ギリシャ語に変わっていった。キリスト教信仰は自然的に、また意図的に、すなわち信者たちが散らされることで、また計画的な宣教活動で帝国全域に広まった。ユダヤ人たちがローマ帝国のいたるところに住んでおり、人口の7パーセント以上を占めていた。ユダヤ人の捕囚時代に発展したシナゴグ運動は今や離散した人々と共に広まっていった。シナゴグを通して多くの異邦人たちはユダヤの一神教に惹きつけられ、彼らの一部は割礼を受けた。しかし多くの人たちは「神を畏れる者」にとどまっていた。離散のユダヤ人の一部と彼らに影響された異邦人たちは福音宣教と教会設立の豊かな土壌となった。パウロやその同労者の働きはルカ文書でよく知られているが、いたるところへ出向いた無名の数多くの宣教に専従した人々がいたことは疑い得ないことである。

それにもかかわらず、無数の匿名の信徒の証し人なしには教会はこのように拡大できなかったであろう。最初の3世紀の間に、教会は、すべての始まりであるパレスチナやパウロの伝道旅行とかかわる地域のみならず、エジプト、ヌビア（今のスーダン）、メソポタミヤ、シリヤ、北アフリカ、イタリア、南フランス、スペイン、イギリスで設立され成長した。すでに第1世紀後半に始まったローマの迫害にもかかわらずこの驚くべき成長は、聖書に記されているだけ

でなく、イグナティオスの手紙（紀元 110 頃）、プリニウスの手紙（紀元 112 頃）、クレメンスとオリゲネスの文書（エジプト）、テルトゥリアヌスとキプリアヌスの文書（北アフリカ）、エイレナイオス（フランス）、カイサリアのエウセビオスの文書に書き残されている。これらの文書は、初期の教会にどのような障害があろうとも回心者を得ることが出来、またそれが可能であるという確信のあったことを語っている。また当時の文書は、ギリシャ語が全帝国の教養ある人々の間では理解されていたが、大衆に福音を伝えるために、3 世紀までに聖書をラテン語、ケルト語、コプト語やその他の地方の言葉に翻訳し始めたことを示している。3 世紀末まで教会は都市に集中する傾向があったが、ローマ帝国のどの地域でもある程度福音は浸透していた。パウロの伝道活動の記録で明らかなごとく、ローマ帝国全域に教会を設立する計画があった。さらに初期の時代に使徒言行録に記されている地方のみならずローマ帝国をこえてインドやメソポタミヤにまでも伝道の旅がなされたという記録もある。しかし何よりも、これらの最初の世紀の教会生活は信徒の自発的な熱心な証しが特徴である。心満たされた言葉があふれ出る状態であった（Neill, 20-35）。

また教会の初期の時代は迫害によって特徴づけられる。キリスト者に対するネロ皇帝の恐るべき拷問と殉教は有名である（紀元 64-65）。しかし迫害は最初の 3 世紀間つづいた。それは 3 世紀の半ば、デキウス帝によって命じられた組織的迫害にいたるまで断続的に続いた。殉教に直面して信徒たちが示した勇気と確信は力強い証しとなり、さらに多くの回心者をえる結果になったことを多くの記録が語っている。歴史家たちは、3 世紀終わりにはローマ帝国の人口は 5 千万人であり、その 10 パーセントほどがキリスト者になっていたという（Neill, 38-9）。

これらの初期キリスト者のほとんどは低い身分のまずしい人々、奴隷、女性、職人、小商人、子供、兵隊たちであった。他方、初期の教会は教養人や知識層の人々、信仰と真の知識を福音に基礎付けた殉教者ユスティノスのような人たちをも魅了した。ローマ文学とギリシャ哲学が一般的に後退したこの時代に教会はクレメンスやオリゲネス、テルトゥリアヌス、キプリアヌスなどの才能あ

る人たちを生み出した。第4世紀の最初の20年間に状況は一変した。コンスタンティヌス帝(274-337)がキリスト教に対して徐々に好意を持ち始め、国教としてキリスト教を受け入れ、ついにその生涯の終わりにみずから洗礼を受けキリスト者になった。この時からキリスト者は自由になったが同時にキリスト者であることが流行になった。多くの人にとって、キリスト者になるということは現実的に利益を得ることとなり、何千という人が洗礼を受けた。キリスト者の数はコンスタンティヌス帝の国教化にともない100年の間におそらく4倍になったといわれている。——歴史のこの時点からキリスト者になるということは、何か政治的勢力や文化的影響にかかわるということになったのである。信者による熱心な自発的な証しという意味の宣教は終わりを告げた。最早キリストの名において、キリストのゆえになされるキリスト者の自然な行動の大部分はなくなった。むしろ、多くの人たちにとってキリスト教信仰は、人生とその目的の根源的な変化であるよりは、教理的教えへの同意と結びついた表面的なことがらになりがちであった。

にもかかわらず、4世紀、5世紀の間、活発な伝道活動が特にローマ帝国周辺で続けられていた。たとえばエチオピアのフルメンティオス、タウマトウルゴス(奇跡をおこなう者)としてよく知られているカパドキアのグレゴリオス、アルメニアの啓蒙者グレゴリウス(240頃-332頃)、ゴート人の間で活躍したウルフィラス(311頃-383)——彼は聖書をゴート語に翻訳した——、さらに432年ころからアイルランドで伝道した聖パトリック、北フランス、ツールの聖マルチヌス(316-397)などの福音的な活動がある(Neill, 40-2)。

要約すれば、キリスト教伝道のこの最初の時期を特徴付けるキーワードは、(1)キリスト者は自発的に、またその動機などをよく考えてというよりも、単純に宣教命令を引き継いだ。(2)伝道が直面した文化的対立はほとんどなかった。というのは彼ら自身がすでに多文化と多言語の環境の中で宣教したからである。(3)この時代の宣教は何の政治的含みもなかった。(4)伝道活動は回心者の獲得と教会の形成のための証しに集中し、教育と社会の施設などはキリスト者も関わってはいたが伝道活動の意図的な目的ではなかった(Bavinck, 228-

9)。最初の5世紀の間、キリスト信仰の伝播は目を見張るものがあった。未来は明るく見えた。すなわち人の住んでいるところすべてに何の妨げもなく継続的に福音が前進すると、すべての民族に福音が伝えられるとみえた。しかし現実にはキリスト教の活動はあちらこちらで長い対立の時代に入っていた。ラトゥレット (Latourette) によれば、紀元500年という年は「不安定な千年」の始まりの年であった。しかし実際には教会の宣教的性格の劇的な変化はすでに紀元350年から始まっており、その基本的な形は17世紀の終わりに至るまで継続し1000年以上もほとんど変わらなかった。

B. 「キリスト教世界」の時代における伝道

国家宗教としてキリスト教が認められたために教会は根本的に変形し宣教の歴史が変えられた。ローマ皇帝たちは教会の活動に干渉しようとし、教会は国家に影響を及ぼそうとした。さらにヨーロッパでは何世紀にもわたって皇帝と教皇の関係は支配権をめぐる争いの種であった。したがって中世における宣教活動は古代教会の宣教活動とまったく違う性格をあらわしている。

いくつかの要素がある。(1) 宣教の業は文化の伝達とより密接に結びついた。すなわち、ギリシャとローマに根付いた教会がローマ帝国の東に住む人々と接触したのと同様、北部ヨーロッパと東部ヨーロッパのより原始的な部族と接触するようになったこと。教会の代表者たちは単純に福音を語ることで満足せず、自分たちの優れた文化を伝達する必要を感じた。(2) 宣教活動はしばしば政治の力に支えられ守られた。(3) いく人かの中世の宣教者たちは禁欲的生活にあこがれて遠くの外国に旅をしたが、教会全体としては「キリスト教世界」の拡大、未開の人々をいわゆるキリスト教文化に吸収することを使命としていた。(4) 文化的優位性の確信と政治的支持に保証されて、中世の宣教活動は、一種の寛容さ、究極的にはキリスト教化すると見込んで、地方の古い宗教の教えと行事を受け入れる傾向があった。このことは極端な適応と強要の両方をしめす宣教方法をもたらすことになった。

このような要素が強くなった宣教の歴史の第2時期は中世をこえて紀元476

年から 1450 年の 1000 年間のみならず，キリスト教が国家宗教となったときから 17 世紀の終わりまでを含んでいる。したがって，第 2 時期はキリスト教の北ヨーロッパ征服をもって始まったが，それを継続しつつ 15 世紀から新しい局面に入った。ヨーロッパ人がアメリカ，アジア，アフリカと接触するようになった探検の時代，新しい問題に遭遇した。世界史としては新しい時代がはじまったが，宣教の歴史に関しては本質的に中世の基本的パターンに何の変わりもなかった。一言でいえば，宣教活動は政治的征服と西洋文化の伝達に強く結びついて継続された。それは適応と強要に基づく同化の混ぜ合わされたパターンで成り立っていた。

1493 年，教皇アレクサンデルはヨーロッパが新しく発見した地域の植民地化を，この土地に住む住民をキリスト教化するという条件でポルトガルとスペインの王に許した。そのことを目的としてローマ・カトリック教会はフランシスコ会，ドミニコ会，イエズス会の体制を作り上げた。そして 16 世紀から 17 世紀のはじめまで宣教活動をポルトガルとスペインによるアメリカ，アジアの政治的文化的征服と同一視しつづけた。

この時代（1549-1638）にローマ・カトリック教会の布教と日本とが出会ったことは，征服とキリスト教化の同一視による危険の実例となる。豊臣秀吉と徳川家康はローマ・カトリック教会の布教と政治的介入が密接に関連していることに気づき，日本におけるキリスト教の厳しい禁制を引き起こしたのである。その結果，迫害は何十万という信者の殉教，鎖国，キリスト教の影響を消す歴史上もっとも周到なプログラムのひとつが実行された。この初期の出会いの否定的な影響は今日まで継続している。

宣教の業と植民地化の弊害は徐々に認識され，またスペインとポルトガルの力を弱めるために，1622 年教皇グレゴリウス 15 世は信仰の宣教すべてを直接制御できる中央機関をローマに設立した。キリスト教信仰が植民地化と結合している限り外国の宗教として見られることをローマは認識し始めたのである。17 世紀をとおして努力されたことは，現地人の聖職者を作り出すこと，その土地の文化への適応と国民的あるいは民族的独自性の正当さを少しでも認識する

ことであった。ポルトガルとスペインによる宣教の支配は終わり、フランスがローマ・カトリック教会の布教に大きな役割を果たすようになった (Bavinck, 291-3)。

宗教改革の諸教会が確立されたとき、宣教の召命問題がだんだんと前面にでてきた。17 世紀の中ごろまで、プロテスタント運動が存続の戦いを続けていた。初期のプロテスタント教会の挑戦は退廃したローマ・カトリック教会にたいして自らを確立し、ヨーロッパに福音的教会を形成することであった。同時にいわねばならないことは、プロテスタントがその精力を果てしない分裂と論争に費やし、結局、数多くの分裂した国民的あるいは教派的教会を作り出したということである。そのうえ、この事実とは別に 16 世紀の間、プロテスタント国はヨーロッパ外のより広い世界と接触することがほとんどなかった。スペインとポルトガルは一種の宗教的帝国主義を支配者の政治的帝国主義と結び合わせて、アジアとアメリカへの航路を支配した。北ヨーロッパでは、基本的には支配者が宗教を決めるという当時の習慣に従った。他国によって支配される人たちの宗教に関しては一般的に無関心であった。しかしながらこの状況は 17 世紀オランダとイギリスが制海権をもったときから完全にかわった。これらの国々が植民地化に参加したとき、非キリスト者への宣教の問題が現実の問題となった。

17 世紀のはじめすでに、プロテスタント教会は、非キリスト者への伝道のささやかな始まりが北アメリカ (イギリス人の長老派ジョン・エリオットによるインディアンたちへの宣教)、インドネシア、セイロン、台湾 (オランダ人によって) で試みられた。

オランダの神学者ヘルニウス (J. Heurnius) とヴォエティウス (G. Voetius) の先駆的な業績は、教会を宣教の召しへと呼び返したことである。しかしプロテスタント教会の中でさえ、ほとんどの人は宣教を植民地化と密接に関連したものと見ていたし、東インド会社の手にはゆだねていた。幾人かのヨーロッパのキリスト者から抗議が出されていたが、実際には宣教の業は商業ベースの貿易会社に支配されていた。会社は宣教師の給与を負担し、宣教師たちの働きを、

会社の利益に反することを妨害するという仕方管理した。事実上プロテスタント教会の宣教はその政治力と西洋文化とに依存していた。

要約すれば、第2期（紀元350—1700）の宣教は政治や文化から完全にはなれることはできなかった。ローマ・カトリック教会の多くと初期プロテスタント教会の一部はより広い世界（ヨーロッパのキリスト者に意識されていた）での宣教活動を行ったが、この宣教活動は教会の業として自由に独立的にされたものではなかった。それは常に商業的関心と、あるいは政治的関心との妥協であった。

C. 敬虔主義の影響下における宣教

伝道史の第三期は西ヨーロッパとイギリスで敬虔主義が勢いを得た時から始まった。敬虔主義の源は17世紀のドイツ・ルター教会である。運動の最初の記録はP.シュペーナー（Philipp Spener）の著書 *Pia Desideria*（1675）に見られるものである。その中で彼は当時の教会の正統主義が命を失っていると見て、生きた信仰の回復を主張したのである。シュペーナーとその後継者の目的は、セクトになることや教会から分離することではなく、教会内で自分自身と他の人々の救いに関心をもった人たちから小さなグループを集め、祈りと聖書研究によって、彼らを養い勇気づけることであつた。敬虔主義者たちは個人的な回心と聖化、小さなグループでの親しい交わり、証しをするという責任を強調した。

敬虔主義運動はリーダーやその人格の影響（たとえばハレのA.フランク [August Francke]、ヘルンフートのツィンツェンドルフ [Zinzendorf] 伯爵）によってさまざまな形態をとった。

この運動はモラビア派教会を生み出し、コットン・メイザー（Cotton Mather）やJ.エドワーズ（Jonathan Edwards）など新世界のリーダーたちを鼓舞し、その他メソジストのような運動に影響を与えた。18世紀に少数であるがヨーロッパの敬虔主義者の宣教師たちはインド、グリーンランド、バージン諸島のセント・トーマス、アイスランド、南アメリカのスリナム、アフリカのガーナに送り出された。しかしこの世紀のこれらの宣教活動はきわめて小規模であつた。

にもかかわらず、18世紀の敬虔主義は後のプロテスタント宣教運動の展開に深い影響を与えた。ヨーロッパ大陸のキリスト者の諸グループや諸教会がはじめて非キリスト者に福音を伝えることをはじめた。そして18世紀の敬虔主義が、細い道ではあるが、植民地主義や政治的文化的征服と結びついた宣教から自由になり始めたのである。もちろんそれは小さな試験的な始まりに過ぎないが、召命の自覚を新しくし、キリストとその教会の外にいる人たちに証しをする必要の認識となった。

敬虔主義の影響を受けた初期プロテスタント教会宣教運動には多くの特徴がある。(1) その宣教活動で敬虔主義者たちは東インド会社と植民地の政治権力に頼ることを避け、その召命をまっとうするために、より自由になった。(2) その宣教活動の焦点は福音的説教である。西洋文化を広めようとする傾向を避けて、彼らは個人的敬虔を強調した。終末論的関心から生じた切迫感をもって、彼らは悔い改めとイエス・キリストへの信仰を呼びかけることに集中した。民族文化とその受容の問題は二の次であり、焦点は個々の魂の救いにおかれた。(3) 教会自身は非キリスト者へ伝道する準備はなかった。当時の教会のリーダーたちは理性主義の影響下にあった。既成教会は、その国民文化と同一視されていた。彼らは宣教活動に何の興味ももっていなかった。したがって、この時代の宣教活動は小さなグループの運動、*ecclesiolae in ecclesia* の、宣教について切迫した思いを持った人々による小さなグループの運動になった。(4) 宣教への動機は敬虔主義者たち自身が体験したキリストの愛を証ししたいということであった。そのやり方は、罪を自覚させ、救い主としてイエス・キリストを指し示し、人々をこの救いにあずかるように招くことである。それは感情に訴えることもある伝道の仕方である。(5) 彼らの宣教は個々人を対象とした。その結果、回心者が住んでいる環境と文化とは疎遠になり、無国籍化する傾向 *denationalized* が出てきた (Bavinck, 294-6)。

18世紀はプロテスタント・キリスト者の間で宣教の使命が新しく自覚された時と結論できるであろう。しかしながら、宣教課題の実際の達成にかんしては、きわめて小さな試験的な始まりの時であった。

D. 宣教の世紀

19世紀はしばしば宣教の世紀とよばれる。より正確に言えば、1792年から1914年すなわち第一次世界大戦の始まりの年までが宣教の世紀と呼ばれる。1792年に、福音的カルヴァン主義者で英国人バプテストであったW. ケアリ (William Carey) は、150年前から北アメリカのインディアンになされたプロテスタントの伝道に刺激されて、他の国に宣教師を送る最初の伝道協会を作った。それは、世界のいたるところへ向かう西欧プロテスタント教会の主流に根ざした伝道的なキリスト者たちによる爆発的な宣教活動の始まりに過ぎなかった。この運動は事実上、信仰復興運動が生みだした最も重要なもののひとつである。

プロテスタントの中にヴォランタリズムという言葉で示される新しい雰囲気が生まれた。宣教に参加する者とその宣教活動の対象に関して、人々は個人として決断できると同時に聖書の委任を充たす決断、イエス・キリストを信じ従う決断をできる者とみなされた。

プロテスタント教会はいまだ主導権をとるほどになっていなかったが個々のキリスト者はみずからをキリストから与えられた「大伝道命令」を果たす者と理解して伝道協会を形成した。19世紀末、D. L. ムーディ (Dwight L. Moody) や J. R. モット (John R. Mott) のようなリーダーたちに鼓舞されて、新しい刺激が運動に加えられ多くの若者たちは「この時代に、全世界に伝道すること」にその生涯を捧げた。

敬虔主義の影響が続いている一方、1世紀強の間この時代に宣教運動に新しい局面が開かれた。動機や視野に多様性が出てきたのである。

ここでその宣教の歴史を詳細に描くことはできないが、今日のわれわれの宣教を明確にする助けとして重要な展開のいくつかを指摘したい。

- (1) 植民地主義が最盛期にあったけれども、この時代の宣教の業は政治や商業活動とはほとんど完全に切り離されていた。しかし、文化の伝達と宣教を同一視する傾向は続き、とくにアジア、アフリカで強かった。その理由は西洋の科学や技術の魅力があったといえよう。さらにその伝道の場の条件と必要に応じて、教育的医学的宣教活動が盛んになり、多くの組織が設

立された。

- (2) この世紀中、宣教活動の大部分は本質的に教会や教派によって行われたのではなく、世界宣教、すなわちキリスト者でない人たちと福音を分かち合う幻を得たキリスト者のグループによってつくられた宣教組織や団体によって行われた。にもかかわらず、時代の流れの中で徐々に教会や教派が機関やミッション・ボードをつくりはじめ、宣教活動とかかわるようになった。
- (3) 同時に、19世紀は、それまで見られなかった宣教姿勢の多様性が特徴である。自由神学は他宗教の研究と結合し、合理主義の影響のもとしばしば一種の相対主義に陥り、ある人々は福音の伝達に無関心になった。他の人々はすでに19世紀に社会的改革、発展、経済的繁栄、社会正義を第一義的に強調することによって宣教を世俗化する傾向を示していた。
- (4) 神学的にはこの時代にそれとは違った明確な声が響いていた。G. ヴァルネク (Gustav Warneck, 1834-1910) は、宣教を他の宗教との対話であると主張したE. トレルチ (Ernst Troeltsch) に強く反対した。宣教学の父、G. ヴァルネクは聖書の宣教命令にたいする教会の責任として宣教の正当性と緊急性を訴えた。M. ケーラー (Martin Kähler, 1835-1912) はその時代に先立つ預言者であった。彼は宣教の事柄をもっとも真剣に取り扱った最初の組織神学者の一人であった。彼はみ言葉に根ざした宣教を強調し、宣伝 (自分の文化を伝える試み) と宣教 (福音をひろめる神の使命をみたすこと) とを区別した。ケーラーにとって、贖罪の中心的事実に見られる神の救いの恵みが宣教の基盤であり、この救いにすべての人類が含まれることが神の目的である。証しをするということは罪の負債を恵みの負債に変えられたキリスト者の自然な避けることのできない義務である。伝道することが教会生活の本質的な要素であるゆえに、状況に依存しないのである。彼は教会と神学を宣教の産物と見た。そして宣教を神学の母と呼んだのである (Witness, 138)。
- (5) 広範な宣教活動がこの時期、世界中に広がった時、多くの宣教師たちと支持者たちは、宣教は長期にわたる必要のあること、部族的あるいは国民

的文化を理解しなければならないこと、そして宣教の主な目標は福音を語り土着の文化の中で教会を建てることであって西洋文化を拡大することではないと、徐々に認識するようになったのである。

- (6) 一般的にキリストの宣教命令が強調された。特に 19 世紀半ば、アングロサクソンの世界でおこった第 2 信仰復興に影響され、世界宣教の幻をもったキリスト者のより広い基盤が伸展し、ものすごい力と熱狂の爆発があった。だんだんと福音的キリスト者の大部分が宣教運動にかかわるようになった。数多くの協会が世界中に宣教師を送り、支持するために設立された。最初に、これらの多くの協会は超教派で、また参加したのは宣教に特に深い関心を持っている特別なキリスト者に限られていた。しかし、徐々にアングロサクソン自由教会（国家教会でない教会）のほとんどで、多くの教派的宣教協会が形成された。しかしながら、宣教は全体としていまだ教会の使命あるいは責任とは受け取られていなかった。
- (7) 教派的宣教師を送る機関の発展は内外で、増幅された教派的競争意識と結びついた。神の国の目的と自己の教派の目的とを同一視する傾向が大きくなった。諸教会は宣教活動を通して宣教師を送り出した教会の礼拝様式、信条、組織を移植するようになった。中国キリスト教会や日本キリスト公会のように宣教師の教派と直接かかわらない国民教会をつくる試みもあった。しかし一般的に言えば西洋の教派主義が福音の宣教と共に流出した。
- (8) 宣教の業の多様性がだんだんと明白になってきた。19 世紀の終わり、自由神学は社会的改良を内容とする楽観的な福音を語った。H. R. ニーバー（H. Richard Niebuhr）の皮肉の言葉でいえば、「怒り無き神は、罪なき人々を、十字架のないキリストの助けで、裁きなしの王国に導きいれた」（Niebuhr, 193）。他方、福音主義者たちは、この極端な倫理的強調に反発したが、結果的には、宗教改革とピューリタンが持っていた言葉と行動の一致、回心と社会的かかわりとの一致をしばしば放棄し、うまくかかわりを持つことが出来なかったように見える。世界学生キリスト者運動が J. R.

モットによって刺激され、新しい精神と多くの宣教師が宣教運動に注ぎ込まれたのはまさにこの時期である。1900年には約15,000人の宣教師がヨーロッパと北アメリカから537の組織によって世界のいたるところに送られていった。

- (9) 18世紀には敬虔主義者が宣教の目標は個人の魂の救いとしていたのと対照的に、この時期の宣教は教会形成に力点がおかれた。傑出した長老教会の伝道局監事であり解釈者であるR. E. スピア (Robert E. Speer) は1900年に「外国宣教の目的は、全存在としての人間の救いを世界に知らせること、そして彼らを真の活ける教会に集めることである」といった (Anderson, 101)。
- (10) この時期の標識になる出来事は1910年にエジンバラで行われた世界宣教会議である。この時点では、伝道運動は福音的であり、ある程度エキュメニカルであるという基本的合意があった。それは熱心さと確信に満ちた時であった。1910年エジンバラで西洋の伝道団体がキリストの王的職務を強調したことは驚くべきことではない。宣教師の責任は自明と考えられ、キリストの「大伝道命令」が宣教の唯一の根拠とみなされた。関心は全世界の急速な福音化のための戦略と協力に向けられた。

事実、19世紀は6大陸すべてに教会が設立されたという意味で、またこの世紀は世界規模のキリスト者の交わりが進展し始めたことで、宣教のすばらしい世紀であった。しかしながら、否定的な側面から言えば、この世紀に世界中の多くの国民、文化の中に教会が建てられたとはいえ、この時まで伝道の使命は、他の世界に福音をもたらすのは西洋のキリスト者の責任であると考えられていた。日本がはじめてプロテスタントの宣教活動に出会ったのはこの時代であった。

しかし、1859年に始まった日本へのプロテスタント宣教は白紙の状態から始まったのではなかった。ネストリウス派キリスト教と日本の最初の出会いは、わずかな痕跡しか残さなかった。1549年から1638年にかけてのローマ・カトリック教会の布教による第二回目の出会いは、悲劇的な迫害とキリスト教禁制

という結果を残した。この二回目の出会いはキリスト教信仰に対する深い傷跡と身の毛のよだつ妨げを残した。にもかかわらず、19世紀半ばの植民地主義と世界貿易の競争の中で、日本の鎖国が終わり、日本は西洋のプロテスタント宣教活動の対象となった。その結果、19世紀に行われた宣教の多くの特徴がここ日本の現状の中に見られる。

すべてのプロテスタント・キリスト者のための福音的な超教派の教会を形成するという1870年の幻と努力は、分裂し競争的になった西洋の教派的教会の圧力で挫折した。

E. 第一次世界大戦と第二次世界大戦間の時代

宣教の歴史に新しい時代が始まったのは第一次世界大戦の勃発からである。30年あまりのこの時代は20世紀の二つの大戦を含み、西洋の植民地帝国と日本帝国の解体の時となった。「宣教の世紀」といわれている時代は、宣教団体が西洋の植民地主義と関係して妥協したとすることができるが、宣教運動が世界のさまざまなところで植民地主義を終わらせたということも事実である。第一次世界大戦に続くこの時代の伝道史の特徴を記したい。

- (1) この時代にはプロテスタント・キリスト教会が宣教にかかわるよう呼びかけられているのは個人や宣教協会だけでなく教会も同じであることをだんだんと認識し始めた。伝道は徐々にではあるが教会生活の本質的要素であるだけでなく聖書に記された宣教命令によって教会にゆだねられた職務であるとみなされるようになった。具体的にいえば、このことは宣教活動が構造的に、より直接的に教会組織と関わるようになったということである。特に北アメリカではそうである。それぞれの主流教派は宣教活動のために宣教協会や宣教団体を作っただけでなく、教会の組織へ徐々に構造的に統合していったのである。このことは宣教の課題、すなわちキリスト者でない人たちに証しをし、キリスト教会を設立することは本来個人でなくキリストの体なる教会にゆだねられたことだという認識が育っていたことを示している。

- (2) 19世紀の宣教活動から育ったエキュメニカルな関心と関係はこの時期に加速的に進んだ。国際的な宣教会議がこの変化をもたらす助けになった。宣教師たちの努力で世界宣教の中により大きな一致と協力が認識され始めたことは、古い教会と若い教会の指導者たちの間に新しい関係を形成する場を作り出した。この関係はもはや優れたものとか劣ったもの、送り出した教会と受け入れた教会の代表者というのではなく、キリストに従うパートナーである。
- (3) この新しい関係は伝道という概念に重要な変化をもたらした。多くの宣教師たちは自立の三原則に従って、すなわち自己を管理し、経済的に自立し、自己伝達できる教会を建てようと努力したが、現実には西洋からきた宣教師たちは若い教会を監督しようとする傾向が続いた。しかし今や、伝道は西洋の教会の特権あるいは責任でなく、旧新のすべての教会の召命として理解されるようになった。
- (4) 宣教師たちは西洋文化の外部的、技術的、経済的要素がアフリカやアジアの国々の文化に悪い影響を与えることに気づくようになった。この時代に教会が形成された土地の人々の文化を重んじるようになった。しかし同時に、西洋社会の多くの物質的利点の魅力は否定できないこと、その影響はとめられないことが認識された。さらに二つの世界大戦間のこの時期にヨーロッパでは、人間の能力への確信、社会の必然的進歩への信仰、世界の悪の問題を解く鍵として科学的方法への信頼へと思考方法が変わり始め、懐疑主義、冷笑主義、悲観主義を増大させた。
- (5) この時代の、その他の特徴は民族主義の勃発である。それは、少なくとも一部は西洋の政治的、軍事的、文化的優越感への反発が誘発したものである。諸国は次々と植民地主義に耐えられなくなり、帝国はやがて衰えはじめた。その結果、宣教師の働きは新しい段階に入った。伝道は福音そのものに根拠がなければならない。最早、伝道は他の文化と国々へ影響を与える西洋の侵入としては受け入れられない。教会と宣教師たちは教会が世界のさまざまな文化と国の間で自己を確立しなければならないことを徐々

に認識し始めたのである。

- (6) この時代にはまた北アメリカから送られた宣教師の割合が劇的に増大した。1911年には21,000人の宣教師の三分の一が北アメリカからの宣教師であったが、1925年までにその割合は29,000人の宣教師の半分を占めるようになった。宣教師の全体数は第二次世界大戦の前の不況時代にいくぶん減少し、戦争中はさらに減少した。にもかかわらず、海外伝道の参与は20世紀の終わりまでますます北アメリカのキリスト教の現象になっていった。

第Ⅱ部 神学的風潮の勃興

- A. 世界大戦の間の早期に、教会の中におこったファンダメンタリストと近代主義者の論争に影響されて深刻な分裂が宣教活動に広がり始めた。伝道思想の根本的な変化は自由神学と社会福音運動に影響された教会と宣教団体の中に起こった。この傾向のもっとも顕著な例は組合教会とアメリカン・ボード（ABCFM）という関連した組織である。キリスト教以外の諸宗教を積極的に受け入れ、個人よりも社会への影響を強調して、また福音の宣教を重視することより、現在の世界の生活を救うことにより多くの関心を寄せ、そのようなことを主張した。自由神学の影響を受けた本来の教派的宣教団体のいくつかは、教会の福音主義的立場の人たちの支援を失い衰え始めた。そしてひとつまたひとつと分裂が起こった。この変化の結果、独立したより保守的な海外伝道組織が形成され活躍した。彼らは宣教の場で、教派伝道活動で出来た教会に協力しないで動いた宣教師たちを派遣し、その結果小さな教派が多数生み出された。一方では、より福音主義的なプロテスタント教会や伝道協会また伝道運動の指導者たちは妥当な方法、すなわち福音的、エキュメニカルな仲間として共同する道を模索していた。
- B. 1920年末から1930年にかけて、伝道運動についての論争が活発になった。1928年エルサレムで行われた国際宣教会議では、19世紀の自由主義の影響がアメリカ自由主義者の相対的思想の中で明確に残っていた。この思

想に対してK.ハイム (Karl Heim), H.クレーマー (Hendrik Kraemer) が激しく反対した。アラビアに伝道した RCA の先駆者、プリンストン神学校教授の S.ズウェーマー (Samuel Zwemer) やその他、多くの人々も反対した。1928 年、エルサレムでの国際宣教会議の収穫はキリストの祭司的職務を強調し、十字架を奉仕と責任と犠牲の象徴として理解したことであった。伝道の目的は神の国の実現とみなされた。

- C. いずれにせよ、数年のうちに、1932 年信徒外国伝道調査報告書の要約がハーバードの W. E. ホッキング (W. E. Hocking) の編集で『宣教の再考』と名づけられてアメリカで出版された。それは極端な自由主義的立場を表していた。それはキリスト教以外の宗教と提携して真理を探究することを求めていた。ホッキングは後にその見解を展開させて、急進的な転換でなく、総合と概念の再考によってひとつの世界信仰へ至る道を説いた。R. E. スピアと J. A. マッケイ (John A. Mackay) (後のプリンストン神学校学長) はこの思想を否定した。マッケイはこの思想を「19 世紀のロマンス主義の終焉」と特徴付けた。アメリカでこの思想に唯一賛同した伝道協会は ABCFM であった。しかし伝道問題に関する混乱は宣教師派遣の減少と多くの教会の伝道に対する経済的援助の下落である。
- D. この間、K. バルト (K. Barth) の神学が影響を与え始めていた。1928 年バーゼル・ミッションの K. ハルテンシュタイン (Karl Hartenstein) は『宣教に関するバルト神学の発言』という小冊子を出版した。彼がバルトから学んだことは、伝道には謙虚さが必須であること、聖霊だけが宣教を可能にするということであった。1932 年にバルトはブランデンブルク宣教会議に招かれ「今日における宣教神学」と題して講義をした。バルトはそこで宣教についての彼の考えを要約した。バルトは宣教に向かわせるのは教会の主ご自身の意思であることを強調した。D. ボッシュ (David Bosch) はバルトの講義を次のように要約した。「バルトは敬虔主義者やアメリカの社会福音主義者、また接点として民族に固有の文化を用いるドイツの人たちの神学的前提を取り上げた。そして彼はこれらはすべて神の贖いに変え

て人間を、(より重要なのは)被造物を出発点としているとして否定した。バルトは徹底してキリスト中心、神の贖いを強調した……われわれの宣教活動も神がみ心のままに宣教師を啓示の奉仕に用い給わないならば、それは単に人間の努力にとどまってしまうとバルトは言う」。ボッシュの言葉を借りれば「この論文でバルトは近代宣教神学の父となった」(Witness, 166-7)のである。1934年バルトは『証人としてのキリスト者』という小冊子を出版した。その内容は1938年タンバラム(インドのマドラスの近く)で行われたIMCの議事録に反映されている。後に1959年に出たバルトの『教会教義学』第4巻3分冊でこの小冊子に論じられている宣教神学がより詳しく展開されている。最初の真の証人はキリストにおける神ご自身である。贖罪と神の召命によってキリスト者は証人になるのである。この召命は恵みのしるし、したがって宣教しないことは義務から逃げることであり、よりも恵みから逃げることであり。証人になることは選択の事柄ではない。証人になるとはキリスト者として生きること、世界にかかわるということの本質である(Witness, 168)。

- E. 1938年H. クレーマーはタンバラムでのIMC会議の準備に、ホッキングへの反駁と見られる『非キリスト教社会でのキリスト教メッセージ』を出版した。クレーマーはバルトの影響を受けて、キリスト教は「啓示宗教である」(1938:23)ことを強調し、聖書の現実性と他宗教や哲学、イデオロギーすべてとの間には完全な断絶のあることを主張した。彼自身も敬虔主義や社会福音から遠く、罪、義、疎外、裁き、赦し、回心、新生を躊躇することなく語った。彼の著書名が示しているとおおり、キリスト教のメッセージはイエス・キリストの必要を非キリスト教社会へ向けて語られたものであり、それにはヨーロッパもアメリカも含まれていると理解されている(Witness, 169)。その上、クレーマーは「教会は常に危機の状況にあり……教会の最大の欠点はたまにしか、そのことに気が付かないことだ」と述べている。教会はその本質と実際の状況の間にある緊張関係のゆえに、常に危機状況に目覚めていなくてはならないのである(1938:24-5)。

- F.** バルト神学の大きな影響を受けた 1938 年タンバラム IMC はキリストの預言者的職務に力点をおき、中心主題を証しとした。しかし、この会議の今ひとつの主題は教会と宣教の関係であった。すでに論じたごとく、19 世紀までは伝道はプロテスタント教会の周辺の事柄に過ぎなかった。やがて徐々に伝道は教会に責任と考えられるようになったが、その大部分は教派主義に捕らわれるようになった。タンバラムではエキュメニカルな文脈で、教会と伝道が一つとなる新しい道筋がつけられた。ボッシュの言葉を借りれば「強調点は神の国を指し示す証しの教会と、西洋の教会と共に神の国への途上にある若い教会の発見におかれた」(Witness, 171)。
- G.** 第二次世界大戦の開始までには世界規模の伝道運動は、世界規模の教会をつくることに至った。しかも宣教の本質について何の共通理解もない教会になったことは事実である。宣教のメッセージや動機や目的について決定的な相違が起こり、伝道運動は多くのものに分裂した。この様相を的確に言い表すことは難しいが、議論を進めるために、あえてその動きを自由主義的エキュメニカル、福音主義的エキュメニカル、福音主義的根本主義と名づけた。この教会分裂は本来的でない多様性と、第二次世界大戦後の世界宣教でおこったさまざまな議論、分離、争いの根であることを明らかにしている。

要約

ここまで、われわれはキリスト教伝道の五つの時代の特徴とそこから生まれたキリスト教会の展開を述べた。われわれの見解では使徒後の教会は多文化と多言語の伝道する教会であった。そしてこの時代の宣教は行くところ行くところですべてのキリスト者は自然に証しをすることであった。

キリスト教が国教となった以後の長い第 2 期には、禁欲主義の影響を受けた短い期間を除いて、宣教運動は経済的、政治的、文化的、教会的植民地主義に動機づけられ宣教団体はそれに妥協したことを指摘した。

第 3 期には敬虔主義がプロテスタント教会に宣教を促したが、それはきわめ

て限定された始まりであり、キリスト者の小さなグループによる個人への伝道であった。

第4期は、しばしば宣教の世紀と呼ばれる。この時期、福音的キリスト者は宣教師を送る団体を組織し、遠く地球の果てまでいたるところに教会を建てるために福音を宣べ伝えた。しかし宣教はいまだ西洋の教会の責任とみなされ、教会生活の周辺にとどまっていた。

二つの世界大戦の間、第5期になって、キリスト教は宣教の時代に形成された若い教会を含む世界規模の交わりになった。宣教はすべてのキリスト者とすべての教会による相互責任という感覚が育ち始めた。そして伝道は教会自身の召命と見られるようになってきた。同時に、宣教運動において示されたある程度の一致は分離分裂を生み出していた分派的神学によって壊された。それにもかかわらず、宣教神学の研究が始まっていた。

第二次世界大戦後、教会と宣教活動が新しい時代に入ったとき、ほとんどの国にキリスト教会があったが、聖書の権威、福音の意味、伝道の妥当性と目的、教会と伝道の関係について何の共通理解もなかった。20世紀の後半の伝道に混乱の種が蒔かれていた。

日本のプロテスタント教会はもちろん、この時代の伝道運動の産物である。そのようなものとして、われわれは、キリストの体なる教会にゆだねられたキリストの委任を受け継ぐものとなった。しかし、また伝道運動の問題と答えの出ていない問いと、使徒後の教会のように自発的に宣教する教会になるかどうかという課題をも受け継いだのである。

(Gordon D. Laman)

引用参考文献

- Anderson, Gerald H. "American Protestants in Pursuit of Mission: 1886-1986." *International Bulletin of Missionary Research*, Vol. 12, No. 3 (1988): 98-118.
- Bavinck, J. H. *An Introduction to the Science of Missions*. Philadelphia: Presbyterian and Reformed Publishing, 1961.
- Bosch, David J. *Transforming Mission: Paradigm Shifts in Theology of Mission*. Maryknoll: Orbis Books, 1992.

- . *Witness To The World: The Christian Mission in Theological Perspective*. Atlanta: John Knox, 1980.
- Kraemer, Hendrik. *The Christian Message in a Non-Christian World*. Grand Rapids: Kregel, 1938/1956.
- Neill, Stephen. *A History of Christian Missions*. London: Penguin Books, 1964.
- Niebuhr, H. Richard. *The Kingdom of God in America*. New York: Harper, 1937.
- Verkuyl, J. *Contemporary Missiology: An Introduction*. Tr., Dale Cooper. Grand Rapids: Eerdmans, 1978.